

保育内容「環境」の保育力を培うための ガイドブックとしての俳句歳時記

田 中 俊 明

要 旨

俳句歳時記とは、俳句の季語を集め、分類整理し、季語の解説と例句が書かれている辞典である。古くからの日本人の自然とともにある暮らしの感覚が季語として結晶化されている。本論文では、俳句歳時記が保育内容「環境」の保育力を培うためのガイドブックとしていかに適しているかを考察するとともに、「環境」領域の保育力を培うための俳句歳時記活用のヒントについて提案した。

キーワード：保育、環境、自然、俳句歳時記

1. 「環境」領域における子どもと自然とのかかわりの重要性

「環境」領域においては、子どもと自然とのかかわりが重要視されている。1998年の改訂以降、「幼稚園教育要領」の「環境」領域の「ねらい及び内容」において、「ねらい」の第一には、「身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。」と記されている。「内容」においても、「自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。」「季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。」「自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。」「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。」など、自然と関連の深い項目が示されている。さらには、「内容の取扱い」の中で、「幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然とのかかわりを深めることができるよう工夫すること。」と特記されている。平成29年3月に公示された新学習指導要領にも、上記の項目は継続して記されている。保育所保育指針（平成20年3月）においても、「保育の目標」の一つに（第1章総則，3保育の原理，（1）保育の目標ア，（エ））に「生命、自然及び社会の事象についての興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うこと。」とある。また、「教育に関わるねらい及び内容」（第3章保育の内容（2））において、上記した「幼稚園教育要領」の「環境」領域の「ねらい及び内容」に記載されていることとほぼ同様のことが記載されている。平成29年3月に公示された新保育所保育指針においても上記の項目は継続して記されている。

「環境」領域における保育において、特に子どもと自然とのかかわりを援助する力や環境構成

をする力など、自然を日常の園生活に取り入れる保育者の力量が問われているといえる。子どもの自然に対する豊かな感性（センス・オブ・ワンダー）を育てるためには、子どもと行動を共にし、感動を共有する大人（保育者）の存在が不可欠である（カーソン 1996）。また、草木や虫など身近な生きもの、雨や風などの自然現象に対する大人（保育者）の反応は、子どもたちのその後のそれらに対する反応の見本ともなるものであり、その社会的参照による影響力は大きいと思われる。保育者一人ひとりが自然とどうかかわるかを示すモデルとして子どもたちに影響を与えるという意味で、保育者の自然に対する豊かな感性は、決してプライベートなことではなく、保育者の資質として必要不可欠なことであると考えられる。

2. 保育者の「環境」領域における保育力が不足している現状

すでに10年以上前の中央教育審議会答申（2005）において、幼稚園教員の今日的課題の一つとして「近年は、幅広い生活体験や自然体験を十分に積むことなく教員等になっている場合も見られる」と指摘されている。保育現場の管理職からも、若い保育者の自然に対する基本的な知識や体験の不足が指摘されている（井上 2000）。さらに多くの保育者養成校教員からも、学生の自然体験不足を感じているが、その体験不足を養成校の授業で十分に補うことができていないことが報告されている（田尻・林 2004）。動植物との関わりについても、保育者志望の学生、幼稚園新任教諭、および保育士を対象とした調査（佐藤 2008, 2010, 2011）によると、全体的に植物に対する知識が貧弱であり、これら植物を活用した遊び体験も比較的少なく、せっかく身の回りにさまざまな植物が生育していてもそれを認識できず、また保育に活用していない実態が示されている。保育者および教員養成課程に在籍する女子学生を対象とした調査（木村・野崎 2016）によると、調査者の77%（156名中120名）が「虫が嫌い」と回答したことを示し、若い保育者や教師が子どもたちに身近な自然について教示するということが極めて困難であることが報告されている。以上のように、保育者自身の自然体験の不足が憂慮されているのが現状である。

3. 俳句歳時記を「環境」領域の保育力を培うためのガイドブックとして使うことの有効性について

子どもと自然とのかかわりが重要視され、自然を日常の園の生活に取り入れる保育者の力量が問われている一方で、若い保育者や保育者養成校の学生の自然体験が不足しているという現状がある。養成校の学生もふくめ保育者自身が、もっと身近な自然、季節の移り変わりや動植物など対して興味・関心を抱き、日常生活の中で直にかかわり、それらに対する豊かな感性・心情・思考力を培う必要がある。実は、この課題を少しでも改善してゆくための優れたガイドブックとなるものの一つと考えられる書物がすでにこの日本には存在している。それは、俳句歳時記である。

俳句歳時記とは、俳句の季語を集め、季節を五季（春・夏・秋・冬・新年）、内容を7項目（時候・天文・地理・生活・行事・動物・植物）に分類整理し、季語の解説と例句が書かれている辞

典である。普通は俳句作りに使われる書物である。いくつかの俳句歳時記の冒頭部分に俳句歳時記の特徴を要約した文章が載っているので引用する。図説俳句大歳時記（1964）の刊行の辞には、『歳時記は日本人の感性のインデックス（索引）』とは詩人科学者寺田寅彦の至言です。日本という風土に生きてきた日本人の生活の知恵が季語を結晶させています。季節感、倫理観、美意識、ありとあらゆる日本人の感情が短い文言に収約されて季語となりました。（中略）季語は日本人の生活百科と言っていいでしょう。」とある。合本俳句歳時記（2008）の序には、「季語には、日本文化のエッセンスが詰まっている。俳句がたった十七音で大きな世界を詠むことができるのは、背後にある日本文化全般が季語という装置によって呼び起こされるからである。」とある。新版・俳句歳時記（2016）の序には、「季語には日本の風土に根ざした豊かな知恵、美意識、季節感が凝縮しています。その季語の集大成である『歳時記』には俳人や俳句を愛する方ばかりでなく、広く日本人に愛されてきました。」とある。このように、俳句歳時記には、長い歴史を通して日本人が四季折々の自然とともにある暮らし中で培ってきた感性や文化が季語として集約されているといえるだろう。

ところで、新学習指導要領が平成29年3月に公示された。その幼稚園教育要領の「環境」領域の内容には、従来の内容に加えて、「日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。」という項目が一つ付け加えられた。これからの「環境」領域での保育では、日本の文化や伝統に親しむこともこれまで以上に重要視されてくるということである。そうなる、「環境」領域の保育では「自然」、「季節」、「動植物」、「日本の文化や伝統」などに興味・関心をもってかかわり、豊かな感性・心情・思考力などを培い、生活の中に取り入れるということが重要なポイントとなるといえるだろう。そしてこの内容は、まさに俳句歳時記に五季に分けて記載されている内容（時候・天文・地理・生活・行事・動物・植物）とほぼ重なるといえるだろう。

保育者は、四季折々、日々の暮らしの中で俳句歳時記をガイドブックとして参照し、季語や例句を手掛かりとして、現実世界の自然や日本の伝統文化と実際にかかわり楽しむという経験を繰り返せば、いつの間にか「環境」領域の豊かな保育力が身につくはずである。さらに、長期・短期の指導計画・活動計画、遊びや教材の研究、環境構成、指導者の直接的援助における感性の学び、給食（地域の旬の食材・和食）、園庭など施設内の環境（園庭にある草木・日本の伝統的な暮らしの環境など）の見直し・改善、家庭や地域との連携など、「環境」領域にかかわる保育のあらゆる場面で俳句歳時記を活用できると思われる。

4. 「環境」領域の保育力を培うための俳句歳時記活用のヒント

本章では、「環境」領域の保育力を培うという観点から季語を選び、俳句歳時記活用のヒントを紹介する。下記の3つの内容に分け、さらに各内容を春・夏・秋・冬（新年の季語は冬に含める）の順で紹介する。なお、本章で紹介する季語は、カギ括弧でくくって示す。季語の選択は、今は始める人のための俳句歳時記（2011）、合本現代俳句歳時記（1998）、大人も読みたいこども歳時記（2014）などを主に参考にした。俳句歳時記には、季語が集められて解説が加えられているだ

けでなく、季語を用いた例句がたくさん掲載されている。例句の紹介については、論文の字数制限の都合上ここでは省略するが、例句は季語の世界を実際に体験するための見本例として読んで活用するとよい。

4.1 子どもと一緒に感じたい自然の現象（時候・天文・地理）

暦の上での「春」は、「立春」（二月四日頃）から「立夏」（五月五日頃）までとなる。「早春」のまだ寒さ厳しい中になづかな春の気配を感じる。待ち遠しい春なのになかなか暖かくなならない「遅春^{ちしゅん}」も、次第に「春めいて（春めく）」、「暖か」なくなってくる。「春一番」が吹き、本格的な春が来た。明るい「春の空」にふわりと浮いた「春の雲」、「麗^{うら}らか」な春の日差しを浴び、「日永^{ひなが}」になった「春の日」をのんびりとゆったりと「長閑^{のどか}」に過ごす。「春の山」、「春の野」、「春の川」、「春の土手」、「春の海」、いたるところにそよそよと「春風」が吹きわたり、「春光」をあびて「風が光る（風光る）」。「霞^{かすみ}」が立ち、細い糸のような「春雨」が柔らかく降る。「雪は解^{ゆきどけ}け（雪解）」、「春の水」が流れ、「水は温^{ぬる}む（水温む）」。「人も生きものたちも活発に動きだす。いつの間にか「晩春^{ばんしゅん}」になり「行く春」を惜しむ。

暦の上での「夏」は、「立夏」（五月五日頃）から「立秋」（八月七日頃）までとなる。「初夏」、心地よいさわやかな「風が薫^{かぜかお}り（風薫る）」、心も体も軽くなる。風が湿ってきて、雨が降ったり止んだりするようになると、いよいよ「入梅^{にゅうばい}」。覚悟を決めて「五月雨^{さみだれ}」の風物をじっくりと眺めてみる。すると意外な発見があって面白い。心の持ちようで風景も変わるのだ。「梅雨明け」すると、青空に「入道雲」がわいてくる。紺碧に輝く「夏の海」、透明に澄んだ風が渡る「夏の山」、「夏の川」の溪流、思い浮かべるだけで胸がわくわくする。「炎天」のなかを歩き、「汗」が噴き出して「暑い（暑し）」。「真っ暗な「日陰」に逃げ込み、ああ「涼し」と一息つく。夕方になり、突然「夕立」がくる。何度聞いても「雷鳴」は怖い。火照った体に激しい大粒の雨、ずぶ濡れだけどなんだかさっぱりとして気持ちがいい。雨上がりの「虹」を眺める。もうすぐ日が暮れる。西の空が燃えるように紅い。「夕焼」と「朝焼」、どちらも夏がいちばん色鮮やかだ。

暦の上での「秋」は、「立秋」（八月七日頃）から「立冬」（十一月七日頃）までとなる。「初秋」には、まだ「残暑」が続く。暑い中にも時折さっと「爽やか」な「秋風」が吹き始め、次第に「秋めいて（秋めく）」くる。「野分^{のわき}」が吹く秋は「台風」の季節でもある。ドキドキしながら窓から「稲妻」を眺める。台風一過の「秋晴れ」、澄みわたった「秋の空」に、「天高く（天高し）」、「鱗雲^{いわしぐも}」が広がる。「秋も深まり（秋深し）」、「肌寒」く感じられる日もある。「秋の夜」は「月見」を楽しもう。「星月夜」には「天の川」を見ながら「流れ星」を待とう。秋の「霧」の中を歩こう。「秋雨」の上った後には、いたるところに「露」が光る。「露」中に何が見えるかな。「秋の山」、「秋の野」、「秋の川」、「秋の海」、「秋の田」、いろんなところで「秋色」を眺め、「秋の声」を聴こう。

暦の上での「冬」は、「立冬」（十一月七日頃）から「立春」（二月四日頃）までとなる。「凧」が枯葉を落とし、「時雨^{しぐ}」れ始める頃に「冬将軍」がやってくる。「寒空」に強い「北風」が吹く日は、「虎落笛^{とらおとすゐ}」の音に耳を傾けて、しみじみと冬を感じよう。ちらちらと舞う「風花^{かざはな}」が太陽の光を浴びて美しい。「霜」が降りた「寒い（寒し）」朝は、虫眼鏡を片手に、地面や草木などを

覆う氷の結晶を見つけよう。いろんな形があって面白い。「雪」が降ったら、暖かい格好をして表へ出よう。「雪だるま」を作ったり、「雪合戦」をしたりしているうちに体が温まる。氷点下になったら、「氷」で遊ぼう。「冴ゆる」夜は、「冬銀河」に魂を奪われる。寒さ極まれば、心も「冴ゆる」。「枯れ野」の向こうには「雪の山」が見える。「雪景色」や「冬景色」を「春を待つ（春待つ）」心で眺める。もう「春は隣（春隣）」まで来ている。

4.2 子どもと一緒に楽しみたい日本の暮らし、文化、伝統（生活・行事）

春先は「梅見」に出かけて、梅の花の香りに春の訪れを感じよう。三月三日は「雛祭」を祝う。花といえば桜、桜が咲いたら「花見」に出かけよう。「摘草」は春のお楽しみ。雑草の中にもおいしいものはたくさんある。ヨモギを摘んで「草餅」、桜葉を摘んで「桜餅」、春のお菓子を作って食べよう。八重桜の花を摘んで作った「桜湯」も春の甘いお菓子によくあう。「凧」、「風車」、「石鱖玉」、「風船」、「ぶらんこ」と、春の遊びは楽しいな。風も暖かくなった。「遠足」や「野遊（ピクニック）」に出かけよう。水が温んだら、「潮干狩り」や「磯遊び」にも出かけよう。遊び疲れた日の翌朝は、うとうとと「春眠」を楽しむ。寝坊して遅刻しないようにしよう。

初夏になると、さわやかな風に「鯉幟」がたなびく。「柏餅」と「粽」を食べて「端午の節句」を祝おう。散歩をしながら「草笛」を吹こう。「田植え」も始まっている。みんなもやってみよう。植田の緑が活き活きと鮮やかになる頃は、「蛭狩り」に出かけよう。七月七日は「七夕」を祝おう（旧暦では秋の行事で、秋の季語になる。今の歴では七月七日または八月七日前後に行われる）。梅雨が明けたら、「夏帽子」をかぶって「昆虫採集」に出かけよう。暑い夏には、「かき氷」、「アイスクリーム」、「麦茶」、「冷奴」、「冷素麺」、「冷麦」、「冷やし西瓜」に「心太」。冷たい食べ物おいしい。すっぱい「梅干」で、夏バテも吹っ飛ばさな。いくら暑いといっても、体を壊すから「冷房」はほどほどに。窓を開けて、風の通り道をつくろう。昔ながらの「団扇」や「扇風機」、「風鈴」に「釣忍」は風情があっている。「日除」の「簾」や「葭簀」をかけて、「打水」をする。心まで涼しくなるね。「汗」をかいたら「裸」になって、「行水」に「水遊び」、「プール」で「泳ぐ（泳ぎ）」のも楽しい。さっぱりした後の「昼寝」は気持ちがいい。「夏休み」が始まると、「登山」に「キャンプ」に「海水浴」、夏は最高だ。真っ黒に「日焼」して、夏も真っ盛り。「浴衣」を着て「夏祭」に出かけよう。「花火」大会もみごとだけど、庭先でやる「線香花火」も儂くて美しい。

春に行く園もあるけど、「運動会」は秋の季語。秋には黄金色の田んぼで「稲刈」をしよう。収穫を祝って「秋祭」を楽しもう。「新米」、「秋刀魚」、「栗飯」は秋の味覚の楽しみ。「紅葉狩り」に出かけて目も楽しませよう。

「冬帽子」をかぶり、「襟巻」と「手袋」、「着膨れ」で準備万端、「白い息（息白し）」を吐いて元気よく外に出よう。「落葉」を集めて「焚火」して、「焼芋」を焼いて食べよう。寒いからこそあたたかさを感じる。「悴む」手を火で温めよう。「年末」には「餅つき」をしよう。それから「大掃除」をして、全部きれいにし、心もびかびかにしてから新年を迎えよう。「冬籠」の日には、「あやとり」、「歌留多」、「福笑」、「双六」をして遊ぼう。「ストーブ」で「お餅」を焼いて食べるのも楽しい。風のない「冬晴」の日は、「日向ぼっこ」をしよう。目をつむって「顔」に温かさを感じ

てみよう。心まであったまる。「竹馬」、「独楽」、「羽根つき」、「手鞠」、「凧揚」、昔の遊びも楽しいよ。「節分」に「豆撒き」をして、鬼を追い出し、冬將軍もついでに追い出して、福は内、春も内。

4.3 生きものをつながら・命に触れる（動物・植物）

春になり、冬の間息をひそめていた動物たちが一齐に動きだす。「鳥帰る」（冬鳥たちが北方へ帰る）ころに、「鶯」、「雲雀」、「頬白」など「春の鳥」たちは恋の季節を迎え「さえずり」を始める。「雉」の雄もケンと甲高い声で鳴く。春は鳥たちの声に耳を澄ましてみよう。「燕」など夏鳥が渡ってくる。「鳥の巣」では、「雛」が「親鳥」に餌をねだる姿が見られるはじめる。もう少しすると、まだ飛び方のぎこちない「巣立鳥」に出会えるかも。地上では「猫の恋」が始まり、「猫の子」も産まれだす。「地虫穴を出ず」、「蛇穴を出ず」と、冬眠していた虫や爬虫類、両生類などが土などの中から出てくる。「蛙」は、ぷるぷるの透きとおった卵を産む。「蝌蚪（おたまじゃくし）」も泳ぎだす。「蝶」や「蜂」や「虻」が花のまわりを飛び始める。潮干狩りでもっとも多くとれるのは「浅利」だが、まれに「蛤」が見つかるとうれしい。磯遊びでは、「寄居虫」、「磯巾着」、「海胆」などを探してみよう。

春めいてくると植物たちも目を覚ます。「木の芽」が「芽吹き（芽吹く）」、ふくらんで命の輝きを感じさせてくれる。「梅」、「椿」、「桜」、「桃の花」、「すももの花」、「柳」、「沈丁花」、「木蓮」、「藤」、「躑躅」、さまざまな「春の花」が目と鼻を刺激する。地面からは、いろんな「草の芽」も「芽吹く」。「蒔の臺」、「蓬」、「董」、「白詰草（クローバー）」、「いぬふぐり」、「薺の花」、「蒲公英」、「土筆」・「杉菜」、「繁縷」、「薊」、「すかんぼ（酸葉）」、「野蒜」などさまざまな「春の草」が五感を楽しませてくれる。

初夏になるとどことなくユーモラスな「蟪蛄」が登場する。「雨蛙」もグワグワッと歌いだす。蛙を狙って「蛇」も動きまわる。毒がある「蝮」と「山棟蛇」は怖いけど、その他の「青大将」や「縞蛇」など、毒がない蛇はおとなしいから怖がらなくてもいいよ。水の中にはおながが赤い「井守」、家の壁には「家守」、庭や石垣には「蜥蜴」、小さな恐竜たちもいそがしい。初夏には公園や野山の林を歩いて「落とし文」のゆりかごを見つけよう。公園や野山で、けたたましいトッキョッキョカキョクという声が繰り返し聞こえたら、それは鶯の巣に托卵する「時鳥」だ。ギョギョシギョギョシと葭原で鳴く「葭切（オオヨシキリ）」と並んで夏の鳥の二大歌手だ。最近では都会の水辺でも「翡翠」が見られるようになった。水辺の杭には「鶺鴒」も止まっている。小川や用水路では「目高」を探そう。現代のめだかの学校は汚れた水路の中にある所もある。たくましいね。夏の田んぼは「白鷺」が目立つ。「夏燕」が雛にやる餌を探して飛びまわる。「鳴の子（カルガモの子）」たちがお母さんの後をついてゆく。海へ行ったら「蟹」と戯れよう。「海月」が増えたら海水浴もそろそろ終わり。梅雨の時期、水たまりや池には「水馬」や「水澄」、木の葉には「蝸牛」がいるかも。「蛸」、「揚羽蝶」、「兜虫」、「鍬形虫」、「黄金虫」、「天道虫」、「髪切虫」など、「夏の虫」たちと遊ぼう。「蟻」の道をたどってみよう。縁の下には「蟻地獄」が待っているかも。「蠅」や「蚊」、「蛾」や「毛虫」、「螻蛄」だって生きている。いろんな「蜘蛛」の巣、「百足」の足、口が

象さんの鼻みたいな「象鼻虫^{ぞうはなむし}」、動きが変な「尺取虫」、カラフルだけどよく見ると顔が怖い「斑猫^{まよう}」、虫を嫌がらないで、じっくり観察して見るとどれもみんな面白い。夕方の空をぐるぐると飛び回って虫を食べている小鳥は、ほんとうは鳥ではなくて「蝙蝠^{こうもり}」かもね。

初夏は「葉桜」、「若葉」、「新緑」と木々の緑が一番美しい季節。「花水木」、「石楠花^{しやくなげ}」、「梔子^{くちなし}」、「百日紅^{さるすべり}」、「合歓の木^{ねむ}」、「蜜柑の花^{みかん}」、「柚子の花^{ゆず}」、「栗の花^{りし}」、「柿の花^{かき}」、「紫陽花^{あじさい}」、「薔薇^{ばら}」、「月見草^{つきみくさ}」、「花菖蒲^{はなしょうぶ}」、「蓮^{はす}」、「百合^{ゆり}」、「向日葵^{ひまわり}」、夏はいろんな草や木の花が咲きほこる。「蚕豆^{えんどう}」、「豌豆^{きゆうり}」、「茄子^{なす}」、「トマト」、「青林檎^{せいりんご}」、「さくらんぼ^{さくらんぼ}」、「木苺^{きいちご}」、「李^{すもも}」、「枇杷^{びわ}」、「夏蜜柑^{なつみかん}」、夏の野菜や果物は太陽の味。夏の記憶に残るのは、「夏草」の「草いきれ」のむせかえるような匂い。「朝顔^{あさご}」、「西瓜^{すいか}」、「糸瓜^{へちま}」、「枝豆^{えだまめ}」、「玉蜀黍^{とうもろこし}」なども夏の代表的な植物だけど、俳句歳時記では秋の季語。

秋は「渡り鳥」の季節。夏鳥が去り、冬鳥が来る。「鶉^{ひよどり}」も大群で大移動。「鶉^{つぐみ}」のなかまもやってくる。電線で尻尾をぐるぐると回して「百舌鳥^{もず}」が鋭く鳴く。「秋刀魚」と「鮭」は、秋が旬。「秋鯖^{あきさば}」も脂がのってきておいしい。「日暮^{ひぐらし}」と「つくつく法師^{せみ}」、「秋の蟬^{あか}」が秋を告げる。「赤蜻蛉^{あかとんぼ}」が群れるともう秋だ。「秋の蝶^{はた}」、「飛蝗^{かまきり}」、「蝸螂^{こおろぎ}」もまだがんばっている。「蟋蟀^{せせり}」、「鈴虫^{すずむし}」、「松虫^{のむし}」、「蠹斯^{くわし}」、「馬追^{うまおい}」、「轡虫^{くつむし}」、「鉦叩^{かねたたき}」など、「秋の虫」たちの歌を聴こう。「蓑虫^{みのむし}」が見つかったらもう冬かな。

「芙蓉^{ふよう}」の花が咲いたら秋のはじまり。「金木犀^{きんもくせい}」の匂いがただようと秋も本番。秋の七草、言えるかな。萩、薄、葛、撫子、女郎花、藤袴、桔梗。「菊」は日本の秋を代表する花。道端に可憐な薄紫の「野菊」の花を探してみよう。真っ赤な「彼岸花」もよく目立つ。「紅葉」に「黄葉」、秋の落葉樹は燃えているよう。「柿^{かき}」、「梨^{なし}」、「林檎^{りんご}」、「葡萄^{ぶどう}」、「栗^{りし}」、「柘榴^{ざくろ}」、「無花果^{いちじく}」、実りの秋の甘い味。「団栗^{どんぐり}」はブナ科の果実の総称、「胡桃^{くるみ}」、「银杏^{ぎんなん}」、「橡^{くわ}の実^{こけし}」、いろんな「木の実」を拾いにいこう。「山葡萄^{やまぶどう}」は食べられる。「野葡萄^{のぶどう}」は食べられないけど綺麗だよ。

冬のはじめは、「冬の虫」との名残を惜しもう。「雪虫(綿虫)」にも出会えるかも。雪が降ったら、雪の上に足跡を探そう。「狸^{たぬき}」や「鼬^{いたち}」、「狐^{きつね}」や「兎^{うさぎ}」の足跡が見つかるかも。山地の近くなら、まだ「冬眠」していない「熊」の足跡も。人や犬や猫の足跡を探しても遊べるよ。「炬燵^{こたつ}」のある家の中には「炬燵猫^{こたつねこ}」がいるかもね。「冬の鳥」といえば「水鳥^{かみ}」が目立つ。「鴨^{かも}」や「白鳥^{しろとり}」や「冬鷗^{ふゆかもめ}」、水辺を探そう。「鷹^{たか}」が「鴨^{かも}」を食べに来るかも。冬の魚といえば、「鮭^{さけ}」や「鱒^{ます}」、「鱒^{ななこ}」や「鮫鱈^{さめ}」、そして「河豚^{たたらふく}」、みんな丸々と太って、鱈腹食べてみたいものだ。「海鼠^{なまこ}」や「牡蠣^{かき}」もいいね。

冬は「枯木」をよく見てみよう。面白い形の「冬芽」がたくさんあるよ。けなげで可憐な「冬菫^{ふゆすみれ}」など、「冬萌^{ふゆもえ}」を見つけて生きる力をわけてもらおう。「寒椿」は真冬に鮮やかな花を咲かせる。冬の果物は「蜜柑^{みかん}」、野菜は「葱^{ねぎ}」、「白菜^{かぶ}」、「大根^{だいこん}」、「蕪^{かぶ}」、みんなみずみずしいね。「水仙^{すいせん}」が咲いたらもうすぐ春。春の七草、言えるかな。「芹^{せり}」、「薺^{なずな}」、「御形^{ごぎよう}」、「繁縷^{はこべら}」、「仏の座^{ぶつざ}」、「菘^{すずな}」、「蘿蔔^{すずしろ}」。

5. まとめ

以上、「環境」領域の保育力を培うという観点から季語を選び、俳句歳時記活用のヒントを並べてみた。あくまでも本論文で紹介したヒントは一つの例に過ぎない。俳句歳時記を読み込めば、縦横無尽に現実の自然や日本の文化伝統とつながるヒントがたくさん見つかるはずである。「日本人の感覚のインデックス（寺田寅彦）」である俳句歳時記を手元に置き、日々の暮らしの中で参照して、季語の世界を実際に体験することで、季節や自然とともにある暮らしの感性を体に加え込ませていくことをお勧めする。そうすることがそのまま、うわべだけではない本物の「環境」領域の保育力を培うことになると思われるからである。井上ら（2010）も「自然とのかかわりに関する限り、明日から使えるお手軽な保育のツールはありません。自然とかかわることで育つものは、子どものなかにゆっくり蓄積し、すぐ目に見える形にならないのです。（中略）日々の生活で自然要素とふれあい、時間をかけてゆったりと身体を使って遊びこむことを繰り返し重ねることが大切です。そのためには、まず、保育者が自然のとらえ方を変え、自然を愛で、楽しみます。」と述べている。

俳句歳時記を使う上で注意すべき点の一つがある。それは暦の季節と体で感じる季節との間に多少のズレがあることである。例えば、上記した「七夕」や「西瓜」など、夏の行事や果物が秋の季語とされている。暦の季節は、体で感じる季節よりも早くなっている。このことを注意しておけば、俳句を作るわけではないので、暦の季節にこだわることなく、体で感じる季節をもとに俳句歳時記を活用すればよいと思う。

さまざまな種類の俳句歳時記が出版されているが、季語の写真や図が掲載されていないものが多い。なじみの薄い季語に出会ったら、図鑑、百科事典、辞書、インターネット検索などを活用して調べるとさらに理解が深まるだろう。

文献

- 井上美智子 2000 現職保育者は幼児期からの環境教育をどう考えているか —自由記述欄の分析から— 姫路学院女子短期大学紀要, 28, 33-45.
- 井上美智子・神田浩行・無藤 隆（編著） 2010 むすんでみよう子どもと自然 北大路書房
- カーソン, R. 1996 センス・オブ・ワンダー 新潮社
- 角川学芸出版（編） 2008 合本俳句歳時記 第四版 角川学芸出版
- 角川学芸出版（編） 2011 新版 今はじめる人のための俳句歳時記 角川学芸出版
- 角川書店（編） 1964 図説俳句大歳時記<春> 角川書店
- 角川春樹（編） 1998 合本現代俳句歳時記 角川春樹事務所
- 桂信子・金子宛太・草間時彦・廣瀬直人・古沢太穂（監修） 2016 新版・俳句歳時記 第五版 雄山閣
- 木村紗帆・野崎健太郎 2016 保育者および教員養成課程の女子大学生が虫に抱く意識 —虫嫌いの仕組み— 椋山女学園大学教育学部紀要, 9, 109-119.
- 佐藤英文 2008 短大保育科学生の植物知識に関する調査 鶴見大学紀要, 45 (3), 33-41.
- 佐藤英文 2010 幼稚園新任教諭の植物知識に関する調査 鶴見大学紀要, 47 (3), 29-37.

佐藤英文 2011 保育士の植物知識に関する調査 鶴見大学紀要, 48 (3), 61-69.

田尻由美子・林幸治 2004 「自然とかかわる保育」の実践的保育指導力の養成について (1) —保育者養成校の教員の考えや教育の実態に関する調査研究— 精華女子短期大学紀要, 30, 31-42.

中央教育審議会 2005 子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について—子どもの最善の利益のために幼児教育を考える— (答申)

(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013102/002.htm)

長谷川權 (監修)・季語と歳時記の会 (著) 2014 大人も読みたいこども歳時記 小学館